九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

Two Approaches to the Parasitic Gap Construction in English

黒木, 隆善

https://hdl.handle.net/2324/1440985

出版情報：九州大学, 2013, 博士（文学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開（3）

論文題目　Two Approaches to the Parasitic Gap Construction in English

(英語の寄生空所構文に対する 2 つのアプローチ)

氏　名　　黒 木　隆 善

論　文　内　容　の　要　旨

Two Approaches to the Parasitic Gap Construction in English
(英語の寄生空所構文に対する 2 つのアプローチ)

本論文は、英語における寄生空所構文(PG 構文)に対し、従来の単一の分析の不備を指摘し、2 つの異なる分析が必要であることを論じた研究である。寄生空所構文は寄生空所が生じる位置、すなわち、寄生空所が主語内に生じるか、付加詞内に生じるかによって 2 種類に分類される。従来の寄生空所構文研究のほとんどは、2 つの PG 構文を同一の現象として扱うことを前提とした分析を試みている。しかしながら、それら 2 つの PG 構文を精査すると、それぞれが異なる振る舞いを示す事例が多く見受けられる。そのため本論文では、2 つの PG 構文が異なる文法現象であるという立場をとり、近年のミニマリスト統語論の枠組みの下で、それぞれの PG 構文が別個のメカニズムを介して認可されるという提案を行ったものである。

第 1 章では、PG 構文の典型的事例と一般的特徴を簡潔に紹介し、更に PG が主語内に生起するか、付加詞内に生起するかによって、PG 構文が 2 種類に分類されているということを示した。第 2 章では、1 章で示した 2 種類の PG 構文(主語内に PG が生起する構文を SPG 構文、付加詞内に PG が生起する構文を APG 構文と呼ぶ)の共通点と相違点を列挙した。特に、2 種類の PG 構文における相違点は、(i) APG のみが反構成素統御(anti-c-command)条件に従う、(ii) APG 構文では、APG の位置に再構築しないのに対し、SPG 構文では SPG の位置に再構築する、(iii) APG 構文における顕在的な移動要素は弱い島(Weak Island)の効果が表れないのに対し、SPG 構文の場合にはその効果が顕著に表れる、(iv) 2 種類の PG 構文を分裂文に埋め込んだ場合、SPG 構文の場合のみ非文法的になる、という事例を挙げている。特にこれらの相違点のうち、(iii)と(iv)に関しては、Rizzi (1990)における議論を基に、SPG 構文の場合、顕在的な移動要素が非指示的になっていると論じた。

第 3 章では、2 種類の PG 構文を統一的に分析している先行研究を概観した。PG 構文の統一的な分析方法は 2 タイプに大別される；①PG は空演算子の移動によって生じると想定する分析方法と、②PG は PG 位置から直接移動を行うことにより生じると想定する分析方法である。本論文では、①の分析方法を採用する研究として Chomsky (1986a)の *Barriers* における提案と Nissenbaum (1998, 2000)における形式意味論の観点からの提案をとりあげ、②の研究としては、

Nunes (2001, 2004)における Sideward Movement 分析、Williams (1990)の ATB 構文分析、Kasai (2010)の多重支配(Multiple Dominance)の構造を援用した PG 構文分析をとりあげた。また本章では、これらの統一的分析が前章で取り上げた 2 種類の PG 構文における相違点を適切に捉えることが困難であるということを主張した。

第 4 章では、前章での先行研究を踏まえ、近年のミニマリスト統語論の枠組みの下で、2 種類の PG 構文には、PG を認可するためのメカニズムがそれぞれの構文に対して必要であると提案した。まず、提案の背景として、Chomsky (2007, 2008)における併合と移動の基本概念と、フェイズからの素性継承のシステムを概観した。更に、素性継承のシステムから素性分離システムが理論的に生じるという提案を行った Obata and Epstein (2011)を概観した。また、素性分離システムに付随する想定として、Öztürk (2005)の指示性に関する素性(RF 素性)の議論を援用し、素性分離の際に RF 素性もその適用を受け、移動要素の指示性が薄れると論じた。これらの分析を基盤として、APG 構文では Nissenbaum (1998, 2000)の分析を踏襲し、SPG 構文においては Nunes (2001, 2004)の Sideward Movement 分析を修正したメカニズムを提案した。特に SPG 構文においては、主語 DP の指定部位置への移動を想定し、Sideward Movement が生じることにより、結果的に顕在的な移動要素が素性分離システムの適用を 2 度受けてしまうことになると論じている。

第 5 章では、前章での提案したメカニズムが適切に第 2 章での相違点を説明可能であるということを論じた。相違点(i)は anti-c-command 条件が PG 構文においては適用されないと提案し、APG 構文で生じる anti-c-command 条件の違反は意味タイプの一致条件によって説明可能であると論じた。相違点(ii)に関しては、APG では空演算子を想定し、SPG では直接移動を想定するため、移動のコピー理論の観点から説明可能であると論じた。相違点(iii)と(iv)において、SPG 構文が問題となるのは、前章で言及したように顕在的な移動要素が結果的に素性分離システムの適用を 2 度受けてしまい、移動要素の指示性が弱くなってしまったためであると結論付けた。

第 6 章では、一見特殊な移動に見える Sideward Movement が、Chomsky (2007, 2008)の提案と Chomsky (2013)のラベルに関するアルゴリズムの観点から理論的に正当化されるということを主張した。また、Sideward Movement を近年のミニマリスト統語論の枠組みに適用する際に問題となってくる主語の島条件に関しても、前述のアルゴリズムを援用することによって説明可能となることを論じた。最後に、修正した Sideward Movement を正当化する経験的な証拠として、与格構文に埋め込まれた PG 構文の事例が説明可能となることを論じた。第 7 章で結論を述べ、本論文で提案した PG 構文に対する 2 つの分析方法は、一方が意味部門で、他方が統語部門で作用するメカニズムであり、基本的に 2 つの異なる現象が表層的に類似の現象となっていること論じた。